

題目 他者存在が負の情動処理に与える影響 -事象関連脳電位による検討-

氏名 式部真奈

指導教員 村田明日香

卒論要旨 日常生活において、家族や友人といった他者と一緒に過ごすことは多くあるだろう。そこで、他者との接触によりパフォーマンスや情動が変化することを、社会的影響という。本研究では、社会的影響と情動の関連に焦点を当てた。特に、他者という時に負の情動が軽減されるといった現象に焦点を当て、実験的に検討した。情動に注目することで、パフォーマンスとしての結果が現れる前段階のプロセスを理解することが可能になる。本研究において、情動とは、自律神経系の活動の変化を伴う一時的な強い感情を指す。本研究は、情動における社会的影響に関する先行研究 (e.g. 林 (2004)) を参考に実験を実施し、他者の存在が負の情動へ与える影響を検討した。また、本実験では事象関連脳電位 (event-related brain potential : ERP) を指標とすることで、負の情動の生成プロセスと消失プロセスを分離して検討することができた。また、後期陽性成分 (Late Positive Potential : LPP) は ERP の一つであり、脳内情動処理過程の有効な指標である。LPP は、主に情動成分を反映するとされる (Cacioppo & Berntson, 1994) ため、本実験では LPP を用いて他者の存在が負の情動の生成と消失プロセスに与える影響について検討した。本実験では、画像注視課題を実施した。また、参加者は、ランダムに選ばれた試行においてのみ、情動喚起刺激についての主観的評価を評定した。本実験は、1 人で行う他者なし条件と、他者が横にいる状態で行う他者あり条件の 2 条件を設定した。他者あり条件における他者とは、初対面の女性 (サクラ) であった。また、画像注視課題実施後、参加者は質問紙に回答した。本質問紙では 4 つの心理尺度を利用した (e.g. 他者意識尺度 (辻, 1993))。本実験の結果、主観的評価は刺激の種類によって変化したが、他者の存在の影響は示されなかった。また、負の情動の生成プロセスにおいても主観的評価と同様の結果が得られた。しかし、負の情動の消失プロセスにおいては、刺激の種類のみならず、他者の存在の有無による変化も見られ、他者の存在によって負の情動が抑制されたことが示された。また、LPP 振幅と心理尺度の関連を検討してみると、他者あり・中立刺激の試行タイプにおける負の情動の消失プロセスと他者意識尺度の下位尺度である外的他者意識尺度との間に、有意な負の相関がみられた。これは、外的他者意識尺度の数値が高い参加者ほど、他者あり条件における中立刺激呈示中の負の情動の消失が促進されたことを意味する。